第8回日本ロボット学会学術講演会*

内 山 勝**

本年度の学術講演会は、去る 11 月 1 日（木）～3 日（土）の 3 日間にわたって、東北大学工学部（仙台市青葉区荒巻字青葉）において開催された。今回の学術講演会はちょうど 8 回目（2 進数で 1000 回目）にあたる。発表件数は 382 件で、過去最高を記録した昨年をさらに上回り、記録を更新した。登録参加者数は 679 名であった。会期中の延べ参加者数を表 1 に示す。参考のために過去の発表件数の推移を図 1 に示す。このような発表件数の増加に伴い、予稿集は、昨年の 2 分冊化をさらに押し進めて、3 分冊としたが、値上げはしなかった。

本年度の学術講演会では、従来の特別セッションをオーガナイズドセッションと改め、セッションを一般公募した。その結果、学会の研究専門委員会を中心にテレロボティクス、宇宙ロボットシステム、自律分散型ロボットシステムの 3 件の応募があり、それぞれ 26 件、30 件、15 件の発表があった。テレロボティクスと宇宙ロボットシステムは関連性が深く、セッションを直列に配置したかったが、発表件数が多く一部のセッションを並列にせざるを得なかったのは残念であった。

さて、講演室は機械系の講義室を中心に 9 室準備したが、講義室の大きさにばらつきがあったため、昨年の傾向を見ながら聴衆の数を予測し、講演室を割り振った。実際の聴衆の入りはほぼ予測通りに推移したところもあったが、一部昨年の傾向とがらりと変わったところもあり、小さな講演室に聴衆があふれ、一部の参加者には迷惑をおかけした。これは移り気な会員の興味にも責任があるが、そのダイナミクスを予測し得なかったプログラム委員会にも責任がある。もっとも 1 サンプルングでつぎを予測することは、予測理論の立場からすれば非常に

困難なことで、外れて当たり前、とも考えられる。ロボット学会のアクティビティの高さは定評あるが、これはつぎつぎと新しいものに興味を移す会員の移り気な性格と表裏一体でもあるようだ。

会期の設定でとくに配慮した点は、せっかく東北まで来て頂くということで、学会後をにらんだウィークエンドに参加者が楽しめるようにと会期を設定したことである。大学の教室を借用して学会を開くため、このことは関連諸学科に休講をお願いすることを意味し、かなり異例ではあったが、諸学科のご好意によりこれが実現した。ここに改めて感謝の意を表する次第である。おかげで学会終了後、東北の紅葉と温泉を楽しんだという話をたくさん聞き、主催者側としては喜ばしい限りであった。

会期 2 日目には、例年通り特別行事、そしてそれに引き続き懇親会が開催された。本年度はこれに加えて、本学会法人化にともなう臨時総会、設立総会が特別行事の前に割り込み、かなりあわただしいスケジュールとなったが、8 回目という区切りのよいときにこのようなおめでたい行事が割り込んできたことは喜ぶべきことであった。特別行事は例年通り会長挨拶、表彰式、特別講演と続い

図 1 発表件数の推移

表 1 参加延べ人数

月 日	11/1	11/2	11/3
室 数	9	9	9
午 前	446	493	435
午 後	490	431	292

* The 8th RSJ Annual Conference

** Masaru UCHIYAMA (東北大学工学部)

表 2 実行委員会委員 (順不同)

箱守京次郎 (東北大, 委員長), 内山勝 (東北大, 幹事, 事業担当理事), 福地文夫 (日立東商品, 事業担当理事), 樋口龍雄 (東北大), 猪岡光 (東北大), 江村超 (東北大), 中野栄二 (東北大, 欧文誌担当理事), 北村正晴 (東北大), 石原正 (東北大), 亀山充隆 (東北大), 吉井和夫 (東北大), 井沢義明 (東北大), 荒川章 (東北大), 高橋隆行 (東北大), 木村浩 (東北大), 安田南枝 (東北大), 松川卓二 (東北大), 佐藤勝俊 (八戸高専), 大日方五郎 (秋田大), 橋元皓 (岩手大), 佐藤高志 (一関高専), 佐々木実 (宮城高専), 那須康雄 (山形大), 坪内孝司 (宇都宮大), 遠山茂樹 (農工大), 田口幹 (神奈川工科大), 永田和之 (東北工試), 角田稔 (福島工試), 北垣高成 (電総研), 藪田哲郎 (NTT)

た。表彰式では、論文賞に加え、本年度より新たに創設された技術賞が表彰された。

本年度の特別講演は半田康延氏 (東北大学医学部教授) による「麻痺筋への電気刺激による関節運動制御」であった。交通事故などにより神経系統が切断され、麻痺した患者の筋肉に電気刺激を送ることにより人工的に上肢あるいは下肢の運動を制御し、機能回復をはかるといふ氏の長年の研究成果が明解な語り口により紹介され、日頃ロボットの研究に従事する多くの聴衆に深い感銘を与えた。講演後、特別講演とは思えないほどの熱心な質疑応答がなされ、医療を含む生体関連分野とロボット工学との間の密接な関連性が改めて痛感された。

特別講演会終了後、会場を街中の宮城第一ホテルに移し、懇親会が開催された。参加者数は予想をはるかに上回り、なぜか特別講演会の参加者数までも凌ぐほどであった。その込み具合は東京の山手線ほどではないが、仙台の朝の地下鉄の込み具合には負けないほどであった。ロボットには「顔」がなければならないという箱守実行委員長の挨拶、そしてその「顔」である花房会長の挨拶、大野副会長の乾杯の音頭もそこそこに、「ピラニア軍団」と異名を持つ本学会の懇親会参加者はほとんど瞬時に料理を食べ尽くし、その後はビールとウィスキーだけで、予定時間をはるかに過ぎるまで和やかな歓談が続いた。

なお、本年度は新たな試みとして、東北大学工学部のコート借りてテニス懇親会を企画したが、前日のあいにくの雨で中止となってしまったのは残念であった。次回に期待したい。また、学術講演会とは独立した企画であったが、関連行事として、学会の前後に、宇宙用双腕知能ロボットの国際ワークショップ (本学会主催)、およびロボットコンテスト (本学会共催) が開催され、それぞれ盛況に行われた。

写真 1 会場風景

最後に、実行委員会について述べておかなければならない。東北地方も最近はロボットの研究者数が増えたが、まだまだみちのく、研究者の絶対数は少ない。そこで、実績のある計測自動制御学会東北支部に全面的な支援を仰ぎつつ、経験の豊かな関東地区の会員を若干名加えて実行委員会を組織した。その組織を表2に示す。広大な東北地方をカバーするために実行委員の数が例年と比較して若干増えたが、理事会にご承認頂き、本年初めに実行委員会を発足させた。発足当時、東北在住の実行委員には本学会の会員が少なかったため、委嘱状と入会申込書を同時にお送りするという手荒なこともしたが、快くお引受け頂き、本当に感謝している。

本学術講演会の発表件数は年々増加の一途をたどり、ロボット学会設立当初の古き良き伝統——学会での密な討論——を維持するのが次第に困難になってきている。そこで、本学会では、新たに春のロボットシンポジウムを企画した。第1回は東北大学工学部において来年春の連休明け (5月9日 (木)~11日 (土)) に開催される。多くの会員の参加を期待する。また、次回の学術講演会は筑波大学において開催される予定である。

最後に、前回の学術講演会についての詳細なメモ (ノウハウ集) をお送り頂いた芝浦工業大学の佐藤晟先生、献身的な仕事をされた学会事務局の樋口和子さん、大森智恵さん、実行委員諸氏、その他関係諸氏に対してここに心から感謝の意を表する。